

第6章『従業員承継の課題

～どこまで心を開けるか～』

大阪府事業承継・引継ぎ支援センター
統括責任者 兼田 亜貴



「社長に頼まれたことを、『できません』とは言えなかったんです」。30歳の若き後継者候補であったAさんが、静かにそう語りました。

相談に来られたB社長は、「彼しかいないと直感した。責任感もあるし、家族も応援してくれている」と満面の笑み。私も「それは心強いですね。これで安心して次に進めますね」とお伝えしました。

親族が会社を継ぐのが当たり前だった時代は過ぎ、今は“従業員承継”を選ぶ経営者が着実に増えています。事業承継・引継ぎ支援センターでも、こうしたケースの支援は年々増加中です。

取引先や社員への説明、借入金や保証の整理など、手続きは山のようにあります。だからこそ、私たちは経営者と後継者の双方に寄り添い、どうすればスムーズに

バトンを渡せるかを一緒に考えます。ときには、家族も交えて話し合うこともあります。

そんな中でも、Aさんは「頑張ります！」と笑顔で答え続けていました。B社長夫妻も安心しきっていた様子でした。ところが数か月後、「やっぱり自分には無理です」とAさんが辞退を申し出たのです。正直、私は少し予感していました。打ち合わせのたびに、Aさんの表情にどこか迷いの影が見えたからです。

腹を割って話そうと、B社長は初めてAさんを食事に誘いました。これまで仕事優先で、ゆっくり話したことがなかったといいます。その場で、Aさんは「次期社長だ」と噂が立った途端、年上社員から距離を置かれ、孤立を感じていたと打ち明けました。涙ながらに語る姿に、B社長も「そんなに苦しんでいたとは…。もっと早く向き合うべきだった」と深く反省されていました。

事業承継とは、単に経営を譲ることではなく、“想い”をつなぐこと。そして、その覚悟を支えるのは、誰でもない——現経営者自身です。心を開き、相手の本音に耳を傾けること。そこから、悔いのない承継が始まります。

